

---

**のは Scarlet&blue 先行公開、超ネタバレ番外編（ちゃんと本編掲載するから待っててね）**

三月語

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは S c a r l e t & a m p ; b l u e  
先行公開、超ネタバレ番外編（ちゃんと本編掲載するから待っててね）

### 【Nコード】

N 4 2 4 2 S

### 【作者名】

三月語

### 【あらすじ】

この物語は、ある日を境に魔法の力に目覚めた優しき少年（青年）と彼を想い慕う少女達などが織り成す笑いあり恋あり嫉妬あり（！？）な話・・・の先行公開版の番外編です。

一部壮絶なモノがありますが気にしないで下さい。

後、必ずしも毎回最新話として投稿する、という事は無いので、後書きに更新予定日を書いておきます。

**番外編 注意書き&原作外キャラ先行説明（前書き）**

今回は前置きみたいなモノだと思ってください。

## 番外編 注意書き&原作外キャラ先行説明

本編をご覧になる前に、この小説について説明します。

この小説は、『作者が『魔法少女リリカルなのは S c a r l e t & a m p ; b l u e』の本編を書いていたところ、何故か先に番外編の構図が出来上がってしまい、どうしようもできなくなったために先行掲載した番外編だけの小説』です。

時系列は、A's P o r t a b l eからS t r i k e r Sのちょうど間、そしてS t r i k e r Sの時期です（全部番外編として扱っております）。

区分としてはS t r i k e r Sまでを（A）、S t r i k e r S以降を（S）とします。

元からラブコメ形式で展開されます。一部、キャラの設定がおかしくなっているところがありますが、そこは気にしないでください。また、タグ通り、R15は当たり前だと思っていてください。

また、この話は後に本編で改変されて掲載されます。あくまで一時  
凌ぎの扱いで、生温かい目で見守っていてください。

次は、本編で出てくる、原作には登場しないキャラ、あるいは名前  
が改変されたキャラについての簡易的な説明です。

榊原 直人

本編主人公、なのはたちに好かれているリア充人間。

本編では『守りたいものは絶対守る』が信念のカッコいい少年だが、ここではヘタレたりひっかき回されたり不幸少年になったりします。そして、デバイスはBLAZBLUEのラグナ&ジン仕様（知らない人は、ググってね）。

ちなみに料理は自称『シヤマルさんとはほぼ同じ』。

スポーツ万能、と言われているが、本人、カナヅチ。

CV：柿原 徹也（ドイツ生まれの日本人。本人曰く、『ジンは僕がキャスティングされた時点でこうなっていることは大体予測できたはず』らしいです）

代表作：BLAZBLUE ジンⅡキサラギ

魔法少女リリカルなのはシリーズ レヴァンティン、グラファイゼン（Tetsuya Kakinbara名義で）

高町 星奈<sup>せな</sup>

元々『星光の殲滅者』。なのはの妹（的立ち位置）。

直人大好き、完全に一途。だけど料理は超苦手。

CV：田村 ゆかり（従兄弟に『三国無双』の馬超の中の人がいます！ちなみに人見知りな所があるそうです）

代表作：魔法少女リリカルなのはシリーズ 高町なのは

IS-インフィニット・ストラトス・篠ノ之束

ライカ・T・ハラウン（ライカは漢字で『雷華』と当てられています）

元々『雷刃の襲撃者』。フェイトの妹（的立ち位置）。

アホの子は健在。素直なのに・・・

CV：水樹 奈々（皆さんご存じ水樹さんです。一度だけ『食わず嫌い王決定戦』に出てました）

代表作：魔法少女リリカルなのはシリーズ フェイト・T・ハラオウン

テイルズシリーズ コレット・ブルーネル

八神 闇那<sup>あんな</sup>

元々『闇統べる王』。はやての妹（的立ち位置）。はやての『性格改善プログラム（製作者：リンディ・ハラオウン）』を受け、多少は性格が改善された（一人称が『我』から『私』に変わったくらい）。

直人に対して重症のツンデレデレ（ツン：デレ≒3：7）。多分一番変わった子かも。

CV：植田 佳奈（ぶるらじで画伯認定！本人曰くMだそうです。そして自分で認めるゲーマー！）

代表作：魔法少女リリカルなのはシリーズ 八神はやて

BLAZBLUE レイチエルⅡアルカード



**番外編 注意書き&原作外キャラ先行説明（後書き）**

次回は『夏だ！海だ！少女達の恋愛争奪戦だ！？（A）』で、本日（4/12）午後9時に更新します。

時期と内容が合っていない？

それは考えたら負けだと思ってます！

**番外編 夏だ！海だ！少女たちの恋愛争奪戦だ！？（A）（前書き）**

時期が違ふことは気にしたら負けです！

番外編 夏だ！海だ！少女たちの恋愛争奪戦だ！？（A）

番外編 夏だ！海だ！少女たちの恋愛争奪戦だ！？

「う み だ ！！」

聖祥大付属小仲良しメンバー揃って出かけた先は、海。保護者扱いで来たのは偶然休暇中だったリンディとシグナム、シャマル。

見えた瞬間、開口一番に叫んだのは、我らがアホの子、ライカ。

「ライカ、落ち着きなさい？」

「だって海だよ！？落ち着いてられないんだよ！？はしゃいだって仕方ないんだよ！？海だもん！！」

リンディが優しく諭すが、ライカはそんなことに聞く耳持てず。はしゃぐ理由をより興奮したようにまくし立てる。

「ライカ、少しは静かにできないのか！？」

「無理！！」

闇那が遂に痺れを切らせてライカに怒鳴るが、そのライカはすっぱ

り断ち切った。

「貴様・・・私に向かって・・・！だから嫌だ、と言った・・・」

「闇那、ひよつとして海行きたくなかった？」

「ううっ・・・べ、別に、そういうわけじゃ・・・ないのだが・・・  
わ、私はその・・・、なんだ、騒がしいのが・・・嫌いなだけだ・・・  
／／／」

ついには握り拳がプルプル震えだした闇那に直人が聞く。

とたんに闇那は顔を真っ赤にしてどもりだし、最後には殆ど何を言っているのか聞こえないほど小さな声だった。

「直人、大富豪しない？」

「大富豪？いいけど・・・いいの？僕、強いよ？」

バニングス家提供マイクロバスのお陰で殆どメンバーがそろい踏みな状況で、アリサが直人に大富豪で宣戦布告。

「これでもあたしは、大富豪30連勝の兵なのよ？たかをくくって負けた時の言い訳、させないわよ？」

「あ、なら私も。」

なのは、参戦。

「じゃあ、私も・・・」

「私もやるー」

フェイト、さすが参戦。

「私も参加するよー」

はやても。

「私はいいです。直人と一緒にいられるだけで・・・／／／」

「星奈ちゃん！」

「・・・冗談です。ちよつとは・・・（ニヤリ）。」

「そのニヤリは止めて！？なんか裏がありそうで怖いんだけど!？」

なのは、焦る。理由としては、やっぱり直人を取られそうな気がしたから。

「そ、そうだよ!というか、星奈がやらないんだったら私やめとく!」

「ふえ、フェイト・・・?」

フェイト、なぜか離脱。

「フェイトちゃん抜けるの!？」

「なんかいやな予感がするんだもん・・・」

嫌な予感Ⅱ 星奈が直人とイチヤイチャ・・・

「それはダメ!アリサちゃん、やっぱり私も抜ける!」

「直人、抜けないけど・・・?」

『やっぱりやる!!』

「どつちなよあんたたちは!!」

「あ、あはは・・・」

なのは・フェイト、はつきり言って大迷惑かけっぱなし・・・

一方八神家メンバーは・・・

「な、なあはやて・・・」

「ヴィータ?どうしたん?」

「闇那が・・・怖いんだけど・・・」

「闇那が?」

「主はやて、私もヴィータと同じ意見です・・・なにかに切羽詰まったかのような思いつめた表情で・・・」

「ちょお話してみよか?なんで切羽詰まったんか分からんとどうし

ようもないやん？」

「そう・・・ですね・・・」

そんな中、当の闇那はというと・・・

「直人に水着を見せなければならぬのか・・・？は、恥ずかしい・・・いや、でも・・・下手をしたら私は後れを取ってしまう・・・しかし、でも・・・あの水着は・・・／＼／」

海に出かけるその数日前、はやてによって無理やり水着を買わせられた闇那。

選んだのがはやてだったため、水着もまた・・・だった。

「・・・ヴィータ、シグナム、大丈夫だよ。水着でテンパってるだけや。特に気にすることはないよ。」

「そう・・・なのか？」

「そうは見えませんが・・・」

「意外とそうなんやよ？だってな？なお「わー」

っ

！」「むぐむぐ・・・」

闇那、大慌てではやての口をふさぐ。

「おい闇那！はやての口を塞ぐな！」

「塞ぎたくもなるわ！ななな何を根拠に私がテンパってるように  
みみみ見えるんだ！？」

「・・・闇那。」

「な、なんだ！？」

「・・・明らかに動揺してるのが誰にでもバレバレだ。」

「うぐっ・・・」

結局シグナムらに追いつめられる闇那であった。



「海岸」

「お・・・」

ライカ、フリーズ。海を見て完全に止まった。

「来ちゃった・・・来ちゃった・・・」  
「水着・・・水着・・・やっぱり着なきゃダメ・・・だよね・・・」  
「／／／」

なのは、フェイトは恥ずかしさで顔が真っ赤になっている。

「恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい（ry」

闇那は頭を抱えて蹲っていた。ちなみに顔を横にぶんぶんと振って。

「・・・はやてちゃん、なんか皆、相当テンパってませんか？」  
「気にしたらあかんと思うよシヤマル。しゃーないことやる？だって・・・なあ？」  
「・・・ねえ？」

「・・・だよねえ？」

恋愛関係全く無し組―数名が完全に一致していた。意見が。

そんな中星奈は・・・

「直人。水着・・・着てみたのですが・・・どうでしょうか？」

真っ先に水着に着替えていた。

彼女が来ていた水着は黒いセパレートタイプ。明らかに『大人らしさ』を強調していた。

「似・・・合つてると・・・思う、よ？／／／」

「そ、そうですか・・・似合って・・・ますか・・・／／／」

何となく桃色な雰囲気が出来上がっているのに気づいた面々は・・・

「・・・フェイトちゃん・・・」

「なのは・・・」

『着替えてこよう！..!』

二人は一気に更衣室へ・・・

「恥ずかしい恥ずかしい恥ずか（ry」

闇那はまだ同じ行動を取っていた。

そしてその他の面々は・・・

「・・・はやて。」

「・・・なんや？」

「何なのかしら、今、すっごいあの二人がむかつくんだけど・・・」  
「奇遇やね・・・。私も今、ものすっごいむかついとるんよ・・・」

「ま、まあまあ二人とも・・・。落ち着いて・・・？ね？」

『これが落ち着いていられるわけ（ないやろ／ないでしょ）！？』

「そうかなあ・・・？」

「ま、まさか・・・」

「すずか、あんたも勝ち組！？」

「そ、そういうわけじゃないんだけど・・・」

『・・・大人だ・・・』

Orzになっている者・・・

「・・・シグナム・・・」

「何も言っな・・・ヴィータ・・・」

「・・・ところでなのはたちは？」

「ものすごい形相で更衣室へ走っていったのを見たぞ。」

「・・・相当切羽詰まってるな・・・」

「みたいだな・・・」

などとしみじみとしている者・・・

「・・・必死だな・・・」

「そうみたいだね・・・」

ただ傍観してるだけの者がいた。

「海に来た、なんて言っても泳げないんだよね・・・」

その後、闇那を除いた水着品評会が直人の意思関係なく行われ、誰が一番なのか、というのを詰問されていたりした。

ちなみにあとの二人の水着は、なのはは星奈の水着と同じタイプ、白色版。フェイトは黒いレオタードのようなタイプだった。

「直人くん、まさか泳げんとか？」

「そのまさか、なんだよね・・・」

「あはは・・・。でも、こうぼ　　とするのもありかもしれんね。」  
「そうだね・・・」

なんて二人でボケ　　としていたら・・・

直人　　！ビーチバレーやろー！

アリサが直人を呼んだ。

「・・・なんか、忙しいかも。」

「がんばってやー。」

まだ足が治ってないはやてを残し、直人はビーチバレーをしに行っ

た。

しかし、そこで乙女の戦いが勃発した。

ちなみに、メンバーは・・・

なのは・フェイト・アリサ・すずか・星奈・直人。

「じゃあ、直人とすずかは別々にするわね。この二人が同じチームだったら勝てないかもしれないし。」

『それをお願い（します）！！』

「あんたら、そこでそんなチームワークばっちりな発言は控えてよ・・・」

ちなみに、意見がぴったり合った彼女たちの頭の中は・・・

直人がすずかと同じメンバーになる可能性がある!!そこにアリサが入ってしまう可能性がある

!!私が直人（くん）と同じメンバーになれなくなる!?

だった。

「じゃあ、じゃんけんで・・・」  
『最初はグー！じゃんけんぽん！あいこでしょっ！あいこでしょっ！！』

アリサを置いて三人が突然じゃんけんを始めてしまった。

「・・・ちよつと！？あんたら早すぎるわよ！！」  
『あいこでしょっ！あいこでしょっ！あいこでしょっ！あいこでしょっ！あいこでしょっ！』  
「そして決まらないの！？どんだけ偶然が続くのよ！！はあ・・・  
だったら、直人粹一つにしところかしら・・・？」

アリサがそう言った瞬間、更に白熱した。

「もう一回最初からやるよ　っ！！」  
「いいよ！私が絶対勝つもん！」  
「勝つのは私です！あなたたちは辛酸を舐めていればいいんです！」  
『最初はグー！じゃんけんぽんっ！あいこでしょっ！あいこでしょっ！』  
「っ！」

さらに激化したじゃんけん。無駄にスペック高い・・・

そんな三人を放置して、チームの大体な感覚を話す残った三人。

「とりあえずなのはが入った方はフォローに追われるわね・・・。  
はつきり言えば、直人とすずかが同じチームでもなのはが入ったら  
負ける可能性もあるわね・・・。」

「なのはちゃん、運動苦手だもんね・・・。」

「でも、今のなのはちゃんは分らないと思うな。『少しでも直人  
くんがいいとこ見せたい!』って思ってるかもだから、違って見え  
るかもしれないよ?」

話題の中心は専らなのはだった。

「勝った            つ!」

『負けた・・・』

そしてじゃんけんの方も決着がついたようだ。

勝ったのはなのは。

「ようやく決着ついたみたいね。とりあえず今のところは、なのは  
が私と同じ、ってだけよ。」

「ウソ・・・。」

「やった!」

「そうしてもらわないと怒りますよ・・・?」

「あんたの場合、怒る怒らないの区別が分からないから怖いのよ・・・。」



それで、メンバーの二強別れは勝った方が『なのは・アリサ』を手する、という形になった。

そこで直人にもすずかにも両方のプレッシャーがかかっていた。

直人側にはなのはからの

「勝って勝って勝って勝って勝って（ry」

という必勝願掛けが呪詛のように聞こえ、すずかには・・・

「負けないで負けないで負けないで（ry」

「負けたら承知しませんよ・・・？」

フェイトの強烈な願掛けと星奈の凶悪な脅しがかかっていた。

結果・・・

直人：チヨキ  
すずか：パー

「やった            っ！」

「わわっ！な、なのはちゃん！？」

勝ったことが判った瞬間、なのはが直人に抱きついたのだった。

一方、フェイトと星奈は・・・

「ふう・・・」

「むー・・・」

頬を膨らませていた。

そして、ビーチバレーが始まった。

そんな頃、闇那は・・・

「はい、恥ずかしがりさんの到着ですよー」

そうシャルルが言いながら連れて来たのは・・・

《・・・》

全身バスタオルでぐるぐる巻きにし、髪の毛だけが辛うじて出ているだけの『誰か』だった。

「わあっ！！？ちょ、ちょ、シャルル！？だ、誰やこのバスタオルお化け！？」

「あ、闇那じゃないのか！？」

「闇那だとは思いますが・・・判別が・・・難しいですね・・・」

三人がびっくりしていたら・・・

《は、はやて・・・さすがにこれは・・・恥ずかしすぎるぞ・・・》

くぐもった声で声が聞こえた。闇那の。

「は、恥ずかしがることはないと思うんよ。もっとどーんと、思い切っていったらどうや？」

《だ、だったら、なんでちょっと引いた声が聞こえたんだ？》

「そら・・・なあ・・・？」

「・・・だな・・・」

「・・・しょうがないかと・・・」

全員が声をそろえた理由。

それは、異形ともとれる闇那の現在の姿だった。

《だからなんで引いているんだ！？》

「そんなバスタオルお化けがいきなり目の前に現れたら誰だって引くわ！ちよつと待つとり、直人くんすぐ呼んできてもらうから！」

《ま、待て！ま、まだ、こ、ここ心の準備がままだ・・・》

「じゃ、呼んでくる！」

「頼んだで、ヴィータ。」

《ちよつ・・・まつ、むぎゅうつ！！》

バスタオルお化け（闇那）は何故ここまで来れたのかは謎だったくらいだったため、あっさり・・・こけた。

「大丈夫か・・・？」

《大丈夫に見えるのか・・・！？もし見えるのだったら貴様の目は

節穴ということに・・・》

「リンディさん？もっと厳しい性格修正プログラムってあります？」  
【もっと厳しい性格修正プログラムかしら？ちょっと待って・・・】  
《何でもないぞ！何でもないから厳しいのは止めてくれはやて！！》

ビーチバレーの試合場。  
バトルフィールド

全員が絶句していた。

何故かというと・・・

「・・・なのは、あなた、そんな運動神経良かったっけ？」

なのはが今までのなのはを鑑みると別人のような動きをしていた。

「今の私は一味違うんだよ！運動神経悪い私じゃなくなっただんだから！！」

「じゃあ今から海で泳ぐ？ビーチバレー止めて・・・」

「それは無理かも・・・」

「やっぱり直人効果だ！」

現状：なのはが直人効果で変わっていたお陰か拮抗。

「さあ・・・ラストゲームよ！」

とアリサが意気込んだ瞬間だった。

お、いたいた！直人！

ヴィータが直人を呼びに来た。

瞬間、なのは、フェイト、星奈の顔が一気に変わった。

「ヴィータちゃん、何？」

「とりあえず来い！お前らも来れば面白いもん見れるかもしれない

ぞ!？」

「面白いもん?・・・そういえばさつきから闇那見ないわね・・・」

「闇那ちゃんの水着かな?」

「だったら・・・面白いわね・・・!うふふ・・・」

「あ、アリサ・・・ちゃん・・・?」

アリサが発した笑い声に怯えるのは。

「よしみんな!ちよつとビーチバレー休んで見に行くわよー!!」

「そ、それはちよつと・・・かわいそうな気が・・・」

「今まであんなにどれだけ偉そうな目をされたのか忘れたの!?!その報復よ報復!!!」

『え・・・』

そんなこんなでヴィータに連れられた直人の後を追う面々であった。

そんな中ライカは・・・

「・・・あれ？」

沖に大分流されていた。

「・・・みんながいるとこってどっちだっけ？」



「はやて！闇那が水着のご披露だつて！？」

「そうやよー。闇那が渋つとるけどな。」

「あの・・・はやてちゃん？闇那ちゃんって・・・そのバスタオルお化け？」

「そやよ？」

すずかが差したのは、未だに砂浜に倒れて芋虫みたいにくねくねしていたバスタオルお化けこと闇那だった。

「闇那ー？直人くん来たよー？」

《なつ、直人！？なぜ来た！？》（ちゃんとシャルマルが立たせております）

「いやね？ヴィータちゃんが来いつて引つ張つていったから・・・」

「闇那ー？見せたらどうだ？愛しの直人に水着をさ。」

《い、い、愛しの！？そ、そんなこと言われてもだな！ま、まだこここつ、心の準備がでできてない！むむ無理なものは無理だ！そそそそんなことよりヴィータ！愛しのとかいいいい言っな！！》

バスタオル越しなのにも拘らず、超焦っているのが分かる動きをしていた。

「・・・闇那？」

《な、なんだ！？》

「いつまでもそうやってたら私たちで直人を独占しますよ？」

《そつ、それは許せん！というかダメだ！直人は私のだ！！》

「だったら早く水着のお披露目したら・・・？」

《くう・・・ええ

い！！」

覚悟を決めたようで、闇那は身体にまいていたバスタオルを一気に取った。

中にいた闇那は、闇那にしてみればオレンジ色でフリルがあしらわれた派手な感じが漂っているタンキニタイプの水着だったが・・・

何故か、いや、自然な位に似合っていた。

「笑いたければ・・・笑うがいい・・・。どうせ、似合っていないのだから・・・」

「・・・いや、似合ってると思うよ・・・？」

「・・・羨ましいくらいに似合ってるよ・・・」

「なぜ・・・そんなに合うものを・・・」

落ち込む面々がいたが・・・

「なあ直人くん？閻那の水着、似合つてると思わん？」

「う、うん・・・、似合つてると思うよ・・・？可愛いし・・・」

「かつ、かわ、可愛い！？私が！？かわ、かわ・・・」

閻那、完全に顔が真っ赤になっていた。

「あ、閻那・・・ちゃん？」

「ひゃわああああああああああああ・・・」

一気に海へと逃げていく閻那であった。

その時、一瞬だけ彼女が水上走りを生身でしていたという奇跡をしていた。

「・・・あの閻那が・・・ねえ？」

「そうだね・・・。閻那ちゃんってあんなに恥ずかしがりだったんだね・・・」

その後、闇那がしばらく戻ってこなかったりライカが迷子になったり・・・など、色々なトラブルはあったものの、思い思いに海を堪能して、夕方になった。

帰る前、ただ一人海を見ていた直人。

「あの・・・直人くん？」

「ん？どうしたの、なのはちゃん？」

なのはが直人の所に一人で来た。

「（だ、大丈夫だね・・・？誰もいないよね・・・？聞かれてないよね・・・？）な、直人くん、ら、来週・・・い、一緒にお出かけしない!？」

「お、お出かけ？」

唐突なのはのお出かけのお誘い。

「ダメ・・・かな？」

「・・・良いよ？」

「ホント!？」

直人がOKを出した時、なのはの顔が今までにないほど幸せなものになった。

「じゃ、じゃあ、明日、わ、わた、私、直人くんの家まで行くね！」

「う、うん・・・（こんななのはちゃん初めて見たかも・・・）」

この時なのはは浮かれ過ぎていた。

（やった

！直人くんとデートだ

！ど、ど

ど、どうしよ、どうしよ!？何も起こらないよね!？大丈夫だよね!？)

と。

何者かがそんな二人を憎らしげに見ていた、ということに気付けないでいた・・・

**番外編 夏だ！海だ！少女たちの恋愛争奪戦だ！？（A）（後書き）**

次回は時間軸ががらりと代わりStSになります。というか、（A）（S）（A）と順繰りで更新します。

で、タイトルは『ヘルズファンク破廉恥事件簿 File 1（S）』で4/13、午後9時に更新する予定です。

番外編 アリサプロデュース・『なのは告白&キス大作戦』！（A）（前書き）

待つてゐる人はそういない気もしますが、お待たせしました。

今回は某学園コメディーの某遊園地が出ますが、脈絡は無いので。

番外編 アリサプロデュース・『なのは告白&キス大作戦』！（A）

番外編 アリサプロデュース・『なのは告白&キス大作戦』！

なのはが直人をデートに誘ったその翌日。

「なのは？どうしたんですか？いつにもなく顔が緩けきってますよ？」

「気のせいだよ」

星奈に言われるほど、なのはは顔が緩けきっていた。

心の中は穏やかではなく、

（直人くとデート デート はにゃ、どこいこっかな？はうう）

かなり浮かれきっていた。

一方の星奈は・・・



（顔がにやけてますし、心なしかスキップをしているような・・・  
？何かうれしいことがあったんでしょか・・・？）

推測を立てていた。

昼休み・・・

「なのは・・・？どうしちゃったの？今日、あんたすっごい幸せそうなんだけど・・・」

「ふえゝ？なんでもないよゝ？えへへゝ」

「昨日何かいいことがあったのかな・・・？」

屋上でいつもの三人がお昼を食べていた時のことである。

「・・・なのは、正直に言いなさい？昨日、何かあったの？」

「直人くん関係のことなら誰にも言わないよ？」

「・・・ホントに言わない？」

『言わない。』

二人が断言した時、なのはは二回ほどきよろきよろとして、昨日の夕方、思い切った決断をしたことを顔を赤くしながら告げた。

「・・・なのは。」

「な、なにかな？」

「・・・この際告白しちやいなさい！思い切って『好き』って言うちやいなさい！」

「ふえっ！？ふええっ！？こゝこゝこきゅ、告白う！？。」

なのは、アリサの提案に思いきり動揺していた。

「大丈夫よ！嫌いって訳ないでしょ？それにフェイトたちに先越されたくないでしょ？キス。」

「き、きしゅ！？。」

そして声が裏返った。

「なのはぁ・・・、あんた、さすがにそこまで奥手じゃないでしょ？」

「き、き、キス・・・キス・・・」  
「・・・奥手みたい・・・だね。」

苦笑いでテンパったように『キス』を連呼するなのはを見るすずかであった。

「なのは、なのは！ここで思いきり告白しなさい！ここだったら雰囲気も良いかもだし！それに・・・ここによここによ・・・」  
「う、う、うん！が、が、頑張る！」

一方、教室・・・

「・・・星奈、フェイト。緊急事態だ。」

「どうしたの？ 闇那・・・」

「・・・まさか、なのはが朝上機嫌だった理由が分かったんですか？」

星奈の雰囲気が大きく変わる。嫉妬のオーラ全開だ。

「ああ・・・。昨日はやてに言われて直人たちを探しに行った時だ。」

「何があつたの!？」

「早く教えなさい!」

「・・・で、デートの約束をしていた! 直人もOKを出していた!」

「・・・お話・・・かな?」

「お話じゃダメです・・・。お仕置きです・・・。」

「ああ・・・、徹底的にな・・・。」

徹底的な密談が組まれていた・・・。



そして週末。

「じゃ、じゃあ、行ってきます!!」

「いつてらっしゃい。なのは、楽しんできてね 恭也は私たちで押さえておくから、あんまり遅くならないようにゆっくりね?」

「う、うん!!」

なのはは彼女の母・桃子に見送られて家を出た。

「・・・ふふつ。あの子も恋する女の子になっちゃったか。」

そんななのはを見守りながらも、くすりと笑う桃子であった・・・

そして、なのはが玄関を出た瞬間だった。

「あ、なのはちゃん。おはよ。」

「えっ！あ、え、う、その、お、おはよ！（な、直人くん！？なんで！？）」

玄関先に直人がいてなのはの緊張は一気にピークに達した。

「ごめんね？ホントならなのはちゃんが家に来るって話だけど、待たせてたら悪いかな、って思ったんだ。」

「そ、そうなんだ・・・」

「じゃ、行こ？」

直人がなのはに手を差し伸べる。

「う、うん・・・／／／」

なのはも恭しく手を伸ばし、直人の手を握る。

そして、街に向かって歩き出した。

その頃、星奈は・・・



「なのは・・・！抜け駆けなんて、させませんよ・・・！？」

入口から怨嗟の目で二人を（というかなのはを）見ていた。

・・・が。

「星奈？お店のお手伝い頼めない？」

「う~~~~~~~~・・・」

桃子が絶賛妬み中の星奈に手伝いを頼んでいたが、星奈には聞こえていない。

「星奈・・・？」

「へうつ！？」

そして、突然感じた恐怖に慌てて後ろに振り向いたら、魔王がいた。

「お手伝い・・・頼めない・・・？」

「は、はいいつ！！」

とほとほと翠屋に入っていく星奈。

(フェイト、闇那、後は頼みました……。くすん……)

その頃フェイトは……

「フェイト、大人しくしててね？」

「・・・くすん。」

フェイトは未だにベッドに寝ていた。いや、ベッドから出るに出られない状態になっていた。

「なのはがぁ・・・なのはがぁ・・・けほっけほっ！」

そう、フェイトは昨日、風邪をこじらせてしまったのだ。きっかけは『なのはと直人のデートを入浴中に考え過ぎて長風呂してしまった』からだ。

ちなみに熱は38.4。

一応ライカが抑え役となって看病中。

「デートのこと気になるかもしれないけど、今はゆっくり休んで風治さなきゃだよ?」

「ううん・・・こほっこほっ!」

フェイトはじれったそうにしていた。

(闇那・・・、星奈・・・、ごめんね・・・)

フエイトはもう離脱が決定した星奈とまだ状況が分かっていない闇  
那に後を託した・・・

そして闇那は・・・

「なのはあ……！貴様あ……！抜け駆けなどとお……っ！」

電信柱をめきめきと音が鳴るくらいに握りしめていた。

そう、彼女だけが唯一何もなく尾行が出来たのだ。

「直人は……私の……って何を言ってるんだ私は！？だっ、だが、それは事実であって、だが正面切って言うのは……」

そして、電信柱が悲鳴を上げるくらいにまでひびが入っていた。  
が。

「あら闇那ちゃん、いいところに。」

「っ！……なんだ、シャルカ……」

シャルカが闇那を見かけたのだ。手には買い物袋。

「ちょっとお願いがあるんですけど、お荷物、持ってもらえませんか？」

「今私は忙しいのだ！！そんなことに付き合ってる暇はない！」

「お手伝いしないと『ご飯抜きだ』ってはやてちゃんが言ってたよ？」

「うぐっ・・・」

結局闇那も戦線離脱を余儀なくする羽目になってしまった・・・

（フェイト・・・星奈・・・、後は頼んだぞ・・・！）

どちらも既に戦線離脱をしてしまった二人に、後を託してしまった・・・

（はう・・・、直人くんと手、握っちゃってるよぉ・・・／／／）

なのはは完全に緊張していた。というか、恥ずかしさも相まってしまっている。

そして、あの日のアリサの言葉がそれにより拍車をかけてしまっていた。

『告白しなさい！そのまま勢いに乗ってキスしちゃえばそれで勝つのも同然なのよ！！』

（きよ、今日が一番の勝負・・・！こ、告白できなかったらどうしよう・・・。お母さんに色々お願いした意味が無くなっちゃうよー！！）

なのはが母に頼んだこと、それは簡単にいえば『おめかし』だ。

いつもの服ではなく、可愛らしさを表に出した真っ白なワンピースだ。

「えっと・・・、どうしょ？」

いつの間にか駅についており、直人はなのはの顔を覗き込むように聞いてみた。

「あ、あの、あのね！？こ、ここいこつ！？」

なのはがテンパりながら見せたのは、如月グランドパークのチケット。

「如月グランドパーク？うん、いいよ！僕行ってみたかったんだ！」  
「ほっ、ホント！？」

ちなみになぜなのはがこのチケットを持っているかと言うと・・・

金曜日にアリサから貰ったのだ。月曜日『ここに行け』と言っておいて火曜日にチケットの存在に気付き、水曜日に入手、木曜日に届いて、それからのことだった。

ちなみになのはの今回のデートは発案・企画・準備すべてをアリサが行ったことから『アリサプロデュース』と命名された（なのは・アリサ・すずかの中で）。

二人は電車に乗り込み、如月グランドパークへと向かった。



「えっと？『プレミアムチケットのお客様はウェディング体験が出来ます』？へへ。」

入園前、近くの幟を見たらそういつことが書いてあることに気付く直人。

なのはは、というと・・・

「う、ウェディング・・・体験・・・／／／」

ウェディング体験という言葉に顔を真っ赤にしていた。

直人は自分のチケットを見てみたら・・・

『プレミアム優待チケット』と書いてあった。

「・・・できるみたいだよ？」

「う、うえ、うえでい、ウェディング体験できるの!？」

「う、うん・・・」

そしてチケットを見せて許可をもらい、中に入った瞬間だった。

「プレミアムチケットのお客様ですね？」

「あ、はい。そうですか・・・」

「・・・／／／」

声をかけられた。

「プレミアムチケットのお客様限定で写真撮影のサービスを行っております。カップル来場記念として、また二人の思い出の一枚として、どうですか？」

「お、お、お願いしましゅ！／／／」

「お、お願いします・・・」

なのはが物凄い勢いで頼みこみ（そして噛んで）、直人がそのなのはを抑えるように頼んだ。

「はい、では・・・そっちの男の子は好きにしてください。そっちの女の子は男の子の腕に抱きついちゃってください。何なら、体に抱きついちゃってもいいですよ？」

『っ！！！』

スタッフの強い押しに驚く二人だったが、なのはは意を決したよう  
で・・・

きゅ・・・

「な、なのはちゃん!？」

「ちょ、ちよっとだけ・・・こうさせて・・・?／／／」

なのはが直人の体に抱きついていた。

ちなみにお互いに見つめ合っていた時にスタッフが一枚撮っていた。

「では取りまーす。3、2、1。」

パシャッ！

「では、これが出来上がった写真です。今のまま仲良く居てくださいね？」

「は、はい。ありがとうございました。」

スタッフから写真を受け取り、直人は礼を言う。

なのはは・・・

出来上がった写真を見て顔を赤くして俯き気味になっていた。

写真の中の二人は幸せなカップルと言っても過言じゃないような雰囲気だった。

その後二人は色々楽しんでいった。

直人が『どこに行きたい?』と聞き、テンパったなのはが『あ、あそこ!』と言って指を指したのがお化け屋敷。

その様子は・・・

又ウ・・・

「わっ・・・」

「ひゃああああああつ!」

ケタケタケタ・・・

「ひにゃああああああつ!」

「よく出来てるなあ・・・、このガイコツ。」

《この～うら～み～はら～さ～で～おく～べ～き～か～・・・》  
某ハーレム漫画のアニメ版の巫女(CV:みかこんぐ先輩)風に《

「あうあうあう・・・」

「さ、さすがに怖いかも・・・」

どこか怖がつてなさそうな直人と今にも泣きそうな顔になったあの

はが見られたり・・・

・・・て翔子！！これは誤解だ！！」  
「許さない・・・」

と追って追われてのカップルを見てなのはが更に怯えたのが見られたりしていた。

また、変なカップルを目撃したり、着ぐるみが着ぐるみに制裁を加えていたり、なのはが口　コンな男に絡まれた所を直人が子供らしからぬ威嚇でビビらせて逃げさせ、更になのはが惚れこんだ、という光景があった。

そしてその日の昼だった。急展開が起きたのは・・・



「そろそろお腹空いたね。」

「う、うん・・・／＼／」

ちようどお昼も近づいてきたことから、そろそろ昼食を取ろうとする二人。

ちなみになのははお弁当を作ってきていない。否、作ることが出来なかった。理由は星奈。

どうしようかと直人が思案していたら・・・

《（ピンポンパンポーン・・・）えー、お客様にお知らせです。えー、本日、プレミアムチケット来場者のお客様限定で、特別ランチをご用意させていただきました・・・》

こんなアナウンスが聞こえてきた（なんとなくやる気がなさそうだったのは気のせい）。

「特別ランチだって！なのはちゃん、行ってみよ？」  
「う、うん！」

そしてようやくなのはも慣れた（？）のか、いつも通りになってきた。

「アナウンスで言われていたレストラン」

「ほわぁ・・・」  
「ふ、普通じゃ食べれないものだよね・・・これ・・・」

目の前に並べられた料理に驚きを隠せない二人。

小学生でも分かる。それほど豪華なのだ。

『い、いただきます・・・』

いつものように食べ始める・・・が。

（ど、どうしょ・・・）

（た、食べちゃうのが・・・もったいないかも・・・）

そこまで言えるくらいだ。

そうしてもつたいなさげに食べていた頃だった。

《本日はご来場、誠にありがとうございます！ございます！本日はここに幸せなカップルがいらっしやいます！！》

「へっ？」

「ほえ？」

突然正面のステージがライトアップし、司会者（？）がそんなことを言っていた。

《そんなお二人さんは・・・この方たちです！！》

その瞬間、二人にスポットライトが当てられた。

「んむ？」

「ふえっ！？」

直人は何故か落ち着いた状況で、なのはは動揺していた。

仕方がない、一斉にスポットライトが当てられた方に視線が向いたからだ。

「さ、こちらへどーぞー。」

「あ、あの、えと!？」

「キャンペーンの一環です。」

「ほえ!？ふえっ!？はええ!？」

スタッフに連れられてステージへ上がった二人。

そのままセットされた机に座らされた。

『え、入場した時に行っていたきました事前アンケートに元  
いた、二人の信頼を確かめる質問です。質問は全部で三つ。その全  
部に答えられれば・・・ウェディング体験をプレゼント　っ!!』  
『っ!!!!』

ウェディング体験と聞き、一気に顔が赤くなった二人。

『では第一問!お互いの誕生日はいつ?あ、お手元のフリップボー  
ドにご記入ください。』

言われてお互いに書き始める。知らないわけもない誕生日、間違え  
る訳もなく・・・

なのは

「4月2日」

「(直人) 3月15日」

『・・・正解で すっ！！では続いて第二問！お二人が初めて出会った場所は何処！？お手元のフリップボードにどうぞ！』

これも書き始める。なのはがちょっと悩んではいたが・・・

「（二人）『喫茶翠屋』のお客さんとして（僕／直人くん）が来た」

『・・・これも正解です！！では第三問！ラスト問題です！』  
相手が考える、自分の良いところ』とは！？』

「えっ！？」

「しょ、しょんにやことわかにやい！！／／／」

なのは、カミカミな状況に。

しかし、結局は書き始めていく。

そして、出た答えは・・・

なのは  
「自分の意見をはっきりと言えること」  
「（直人）誰にでも優しいこと」

『・・・せ かいで すっ！！おめでと いづれに  
ま すっ！！』

そして、一斉に起こる拍手。

『では、お着替えです。』

そして、二人はスタッフに連れられて別室へと向かって行った。

「一方・・・（ここからしばらくアリサ&すずか側の三人称で送りします）」

「なのはちゃん、大丈夫かなあ・・・？」

「心配じゃなかったら私たちがこんなところに来ないわよ・・・」

二人が心配になって見に来ていたアリサとすずか。ちなみにチケットは一応プレミアム。

ちなみに高町夫妻の依頼でもあるが、とにかく心配だったのだ。

71

「とりあえずあのクイズは全問正解だったみたいだから、後は告白とキスだけね・・・」

「なのはちゃん、頑張れ」

・ちなみにカメラを持ってきていたのは仕方のなかったことである・・・



『では、幸せを掴んだお二人のご入場で  
すっ！！まずは花  
婿から！』

司会者の合図と共に入ってきたのは直人。

「へー・・・結構に合ってるじゃない。とりあえず写真写真・・・」  
「すごいね・・・あ、じゃあ、なのはちゃんはどうなってるんだ  
ろ?。」

「さあ?とりあえず直人の写真は撮っておいたけど。」

直人の写真だけを何枚か撮っておいて（携帯でも撮影済み）、なのは待つ。

『では、花嫁の登場で                   す！！！！』

そして、なのはが入って来た時・・・

まるで時間が止まったかのような状態になった。

「な、なのは・・・なの？」

「きれい・・・」

そのなのはは、ウェディングドレスを着てはいたが、髪を下ろしていたりなど、雰囲気さがらりと変わっていた。

「あ、アリサちゃん写真写真！（ひそひそ）」

「そ、そうだった！忘れるところだった！（ひそひそ）」

慌ててカメラを構え、写真を撮り始めるアリサ。

ちなみに激写しているわけは、高町夫妻のため。

『では・・・ウェディング・・・ということで！告白しちゃったりしてください！！』

その一瞬、アリサはこう思った。『司会者、ナイス！！』と。

「・・・なのは・・・ちゃん・・・／／／」

「あ、あのね・・・？直人くん・・・。その・・・えと・・・」

「行け！告っちゃえ！なのは！ファイト！！（ひそひそ）」

「なのはちゃん、頑張れ・・・！（ひそひそ）」

「あの、ね？わ、わた、わた、私、なつ、直人くんのこと・・・」

す・・・す・・・好きなの！」

「な、なのはちゃん・・・／＼／」

「ま、まだ直人くんの答えはもらえなくたっていいけど・・・、私は直人くんのことが好きだから・・・えと、その・・・」

「なのはちゃん？」

（あうあう～～～！は、恥ずかしくなっちゃった～～～！？ど、どどどうしょ！？・・・も、もうどうにでもなっちゃえ～～～っ！！）

そして勢い任せに直人の首に腕を回し・・・

キスをした・・・

「よ　　っし！！よくやったわなのは！（ひそひそ）」

（な、なのはちゃん大胆・・・／＼／）

「・・・／／／」

「こ、これが・・・私の気持ち・・・。ぜ、絶対に直人くん以外の人を好きにならないっていう、私の気持ちだよ・・・！／／／」

なのはの決意の告白を聞き、キスをされて茫然としていた直人だったが・・・

「な、なのはちゃん、ぼ、僕は・・・まだ・・・、こ、答えを言うことはできないけど・・・その・・・」

「う、うん・・・／／／」

「い、いつか、ちゃんと答えを言うから！それまで、ま、待っていてくれますか！？」

俯きながら、だが、しっかりとした『何れ必ず答えを言う』という決意を告げた。

「・・・はいっ！」

なのはも顔を赤くしてはいたが、満面の笑みで返事をした。

「・・・ねえアリサちゃん・・・」

「どうしたのすずか・・・ってすずか！？どうしたのよそんなに泣いちゃって!？」

「こんな気持ちなのかなあ・・・？子どもが結婚しちゃう時のお父さんの気持ちって・・・ぐす・・・」

「これ、皆に見せたらどんな反応するのかしら・・・」

そう言ってアリサが見つめていたのはなのはが直人にキスをした瞬間の一枚を取ったデータ。

その夜。

アリサらが先に帰ってきていた為に、高町夫妻は直人となのはのウエディング体験の写真を娘に黙ってみせてもらっていたが・・・

案の定、士郎は号泣。桃子もどこか嬉しそうにしていた。

そしてなのはが帰ってきて、二人のデートは無事に幕を閉じた。

ちなみに、今夜の高町家の夕飯に、赤飯が出されていたのはご愛敬。



（直人くん、あの時は勢いで言っちゃったけど、私は本当に直人くんが好き。答えが大人になってからでも、その答えが私にとって聞きたくない答えになっちゃっても、私はずっと、直人くんを想い続けるからね。）

後日。

「なのはぁ・・・」

「抜け駆けとは・・・」

「卑怯だぞ・・・!」

「ぬっ、抜け駆けじゃないもんっ!というか抜け駆け禁止なんて聞いてないよ!？」

なのはが三人に捕まって尋問を受けていた。

ちなみにフェイトだけ涙目。その目は『ずるいずるいずるいずるいずるい』と訴えていた。

「お仕置きですね・・・!」

「お仕置きだな・・・!いや、仕置きという言葉は最早生温いぞ星奈・・・」

『ここはやっぱり・・・拷問（ですね／だな）！』  
「や、やだ、やだよぉ~~~~~」  
「!」

なのはの悲鳴が聖祥大付属小にこだました・・・

番外編 アリサプロデュース・『なのは告白&キス大作戦』！（A）（後書き）

次回は『ヘルズファンク破廉恥事件簿 File 2（S）』で、更新は4/22の予定です。

番外編 ヘルズファンク破廉恥事件簿 File 1 (S) (前書き)

今回・・・いや、この『事件簿シリーズ(仮)』はちとエロかった  
ります。

そして嫉妬します。

・・・女って怖い。

今回は直人となのはが模擬戦しておりますが・・・？(突然バトル  
から始まるのは気にしない方向で)

番外編 ヘルズファング破廉恥事件簿 File 1 (S)

番外編 ヘルズファング破廉恥事件簿 File 1

訓練用フィールドでは、なのはと直人が模擬戦をしていた。

(決定打が……)

(当たらない……)

お互いに決定打が当たらなくて焦っていた。

なのはは直人の『腕』によって攻撃が防がれてしまう。

直人は接近しようにも避けられたりしてしまって攻撃が出来ない。

拮抗状態が続いて数分が経っていた。

(相手の……なのはちゃんの予想の斜め上に行く行動をしないと  
当てられない……かも！)

(直人くん、魔法に使う魔力、私の魔力で補ってるからなあ……)

「激戦だな・・・」

「・・・（そわそわ・・・そわそわ・・・）」

そんな二人の激戦を見て素直な感想を言うヴィータと、全く落ち着きがなくそわそわするフェイト。

「フェイト？どうしたの？落ち着きないけど・・・」

「どっちを応援しようか迷ってるんだよ・・・」

「こういうときは決まっているだろう！？私は直人を応援するぞ！当然だろう！？」

「いや・・・フェイトは好きな人と友達のどっちを応援しようか迷ってるんだよ・・・」

「私も直人を応援します。・・・妻として当然ですから。／／／」  
「そこっ！妻違うだろ！」

こんなやり取りがフィールド外で繰り返されていた・・・（ちなみにフォワード陣は休暇のため外出していた）

「これで・・・決着を付ける！！『ブラッド・カイン』！」  
「っ！（・・・あれは・・・危ないかも・・・！）」

直人がブラッド・カインを発動させたことによって危機感を覚えたのは。

そこから来るある大技は既に自分の目で見て、結果を知っているため、下手に食らうわけにはいかない。

が、その大技の問題点もすでに分かっているつもりだったが。

「デイベイ            ン・・・」

「ヘルズ・・・ファング!!」

そして、収束砲を撃とうとして杖を前に構えた瞬間、想定外の行動で直人が攻撃をしてきたのだった。

「えっ!?!そつち!?!えっ、あつ、ど、どうしょ、もう避けるしか・・・」

パニックっている時に直人が完全に接近、もう避けられない。

（当てるのはお腹!それか肩!弱めで当てる!）

そんな目的で突っ込んでいき、掌を伸ばした・・・



ふ  
に。

が。

「っ！？／／／」

「~~~~~っ！！！！／／／」

やってしまった。

直人がなのはの胸を鷺掴みにしたのだ。

同時にチャージされていた魔力が『ぽすん』という可愛らしい音とともに消失した。

「.....／／／」

フィールド外で見ていたヴィータは、完全に顔を真っ赤にしていた。

「あわわわわ・・・」

そして、ライカは怯えていた。

「・・・なのは・・・？」

「何をしているんだ貴様は・・・？」

「あなたは変態なんですか？それとも痴女ですか？何なんですか？」

その横の黒々しい負のオーラに。

そして、ある事に気付いた。

「あれ？悪いのってなのはじゃなくて直人じゃない？」

『悪いのはなのは（だ/です）！！』

「ひひひひひっ！！」

そしてライカは言いくるめられた。言葉の圧力に・・・

「・・・・・・・・／／」

なのは、ふらふらとゆっくり地上に降りていく。

直人も慌てて追いかける。

「ご、ごめんなのはちゃん！！わざとじゃなくて、ホントはお腹が肩を狙ってただけど・・・ホントごめん！」

地面に降りたなのははへなへなと力抜けしたようにへたり込んだ。

「・・・直人くん・・・」

「はっ、はいい！！？」

直人の声が上ずった。俯きがちななのはに半ば怯えている。

「いきなりなんて・・・ダメだよ・・・。まだ心の準備できてないのに・・・直人くんのえっちい・・・／／／」

「えっ！？そっち！？」

怒られるか砲撃食らうかばか殴られるか、そのどれかを覚悟していただけに、目の前で胸を隠して恥ずかしがっているのはを見

て直人は焦った。

ちなみになのはがへたり込んでいるため、直人からすれば涙目上目使いなのだ。

・・・ああああ・・・！！

「えっ！？」

「ふえっ！？」

そして、奥から怒りMAX！！な女性陣が走ってきた・・・

「直人、直人！何もされてないよね！？大丈夫だよね！？さっきのは直人からやったわけじゃないよね！？悪いのはなのはなんだよね！？」

「ちょ、まつ、くび、というか、かた、そんなに、ふらな、いで、く・・・くあwse drift gyふじk1p・・・」

フェイトが必死の形相で直人に詰問（あくまで悪いのはなのはだという考えで）し、

「なのは・・・あなた、自分からやったのですか・・・？」

「そ、そんなわけないよ！！ホントに避けられなかったんだって！！」

「嘘をつくな！あの動きは避ける気がなかったようなものだったぞ！！」

「そ、そんなあゝ!!」

『さあ、覚悟して(ください/もらおうか)・・・』

「ね、待って!事故なんだって!お仕置きは止めて  
っ!?!」

数分後、模擬戦用のフィールドで大爆発が起きたとな・・・

番外編 ヘルズファンク破廉恥事件簿 File 1 (S) (後書き)

今回は『アリサプロデュース・』なのは告白&キス大作戦』！(A)で、予定は4/20のつもりです。

『夏だ〜』で先述したとおり割り込み掲載になりますのでご注意ください。

感想など、お待ちしております(荒らしは厳禁)。

番外編 ヘルズファング破廉恥事件簿 File 2 (S) (前書き)

事件簿シリーズ第二弾です。

遅くなりましたが、どぞ。



番外編 ヘルズファング破廉恥事件簿 File 2 (S)

番外編 ヘルズファング破廉恥事件簿 File 2

なのはの事故（周りなのはの故意、なのはと直人は事故だと主張し合っている）数日後。

今度はフェイトVS直人が行われていた。

今回はフォワードに参考用の戦いを見せる目的で、なのはと星奈が一緒にいる。

「じゃあ・・・行くよ!」

「いつでも。負けないからね?」

簡単に言葉を交わした直後、二人同時に地を蹴った。

「はっ、速い！？動いたのが見えなかった！！」

「ち、違います！直人さんは後ろに下がったんです！前に傾いてから消えたのでそう見えたように錯覚されたんです！」

「こ、これが・・・執務官同士の本気の戦い・・・！」

キヤロはキヤロでポカーンとしてしまっている。

「まさか、『管理局の紅き死神』と『金色の女神』の戦いをこんな間近で見れるなんて思わなかったけど・・・」

「ところでなのはさん、直人さんのことなんですけど・・・」

「ん？どうしたのエリオ？」

なのはがエリオの質問を受け付け、エリオが思ったことを口にする。

「直人さんって、武器、二つも持っているんですよ？右の腰に細い剣と、背中ホルダーに通してあるだけの大きい剣と・・・。それってどういうことなんですか？」

「ああ、直人くんの武器のこと？簡単に説明すれば、なんだけど、直人くんって管理局史上初の『ツインデバイサー』なんだ。だから、武器を二つ持ってるってわけ。」

「追加の説明ですが、直人のデバイス属性は『闇』と『氷』です。

『闇』を司るデバイスはレアスキルのそれと全く同じ扱いの能力を持っているんです。」

「ありがと、星奈ちゃん。」

「なのは、説明不足にも程がありますよ？このこともちゃんとかわ

ないと・・・」

「にははは、ごめんね？」

なのはが頬を申し訳なさそうに掻いている時、フォワード陣は食い入るように模擬戦を見ていた。

フェイトが押した、と思えば、返すように直人が攻める。その逆も然り。

正に一進一退の攻防戦が繰り広げられていた。

「そういえば直人さんって魔法めちやくちやに撃ってますよね？魔力切れ、起こさないんですか？」

「スバル、いいところに気付きましたね？直人ですが、実は『殆ど無尽蔵の魔力を持っている』と言っても過言じゃないんです。」

「えと・・・どういうことですか？」

スバルが頭の上に疑問符を浮かべている。

「煙がはれたら直人の方をよく見てみてください。戦い始めた時と様子が違ってますから。」

星奈に言われ、煙がはれた瞬間に直人を見たら、一斉に・・・

『何あれ！？』

とおっかなびっくりな様子。

「あれが直人の『無尽蔵の魔力』の答えなんです。直人の『闇』のデバイスは、作用効果で『魔力吸収能力』があるんです。はやての『蒐集』能力とはまた違った、『相手の魔力を魔力によって喰らい、己の魔法の発動用として還元する』という能力なんです。」

その説明を聞いた時、フォワード陣は全員一致の意見を持った。

（な、直人さんが敵じゃなくて良かった・・・）

と。

そして、直人が『ブラッド・カイン』を展開し、またそれを説明、などを繰り返していた時、事件は起きた。

「デッドスパイク・ショット！」  
「っ！」

直人が放った『デッドスパイク・ショット』を避け、地上すれすれに降りたフェイト。

「（今だ！今度こそ事故を起こさない！）ヘルズファング！！」  
「はあああああああつ！」

お互いに呐喊を始めた瞬間

『ゴクッ・・・』

フォワード陣が一斉に固唾を飲んだ。

が。

ドゴオンッ！

『っ！！？！？』

「ふひゃん！」

『っ！！？！？』

突然の爆発に、フェイトの悲鳴（？）が聞こえ、焦る面々。

特になのはは・・・

（も、もしかして・・・！？もしかして・・・！！！？）

なのはが先陣切って訓練場に行き、それに付随するように星奈、フ

オワード陣が向かった。

「フェイトちゃ・・・けほっけほっ！フェイトちゃん、だいじょ・・・」

最後まで言い切る前になのはは黙り込んでしまった。

「なのは、一体何が・・・あああああああああ！？」

星奈、絶叫。

「・・・スバル、分かってるわね？」  
「・・・うん。」

スバルにすぐに指示を出すティアナ。

「えっ？えっ！？何があつたんですか！？」  
「えとあの、なんで目を隠すんですか？」

エリオとキャロの幼いコンビの目を隠した。

彼女らの目の前にあつた光景とは・・・



「・・・・・・／／／」  
「・・・・・・／／／」

倒れた拍子でキスし合っており、まだ闇魔力を持っている右手がフ  
エイトの胸を鷲掴みにしていた・・・

なお、フエイトは足を曲げておらず、直人に完全に乗り上げてる形  
になっていた。

「・・・フエイト・・・ちゃん・・・？」  
「何を・・・しているのですか・・・？」  
「っ！！／／／」

二人の怨嗟を込めた一言でフエイトも直人も一気に飛び退いて離れ  
た。

「えと、ね？その、事故・・・だから、ね？ワザとじゃないって分  
かってくれる・・・よね・・・？／／／」  
「そ、そうそう！ふえ、フエイトちゃん、ごめん！」  
「べ、べべ別にいいいいよ！？む、むしろ嬉しかったし！恥ずかし  
かったけど・・・」

そんな感じで大テンパリで話していたら・・・

「フエイトちゃん・・・？少し・・・お話しよつか・・・」

「いえ、お話では生温いです・・・。お仕置きしましょうか・・・」  
「えっ！？待つて！？さっき事故って言ってなかったっけ！？」

フエイト、必死に弁明。

「フエイトちゃん、私の時に事故って言うても信じてくれなかったんだもん！！」

なのはが叫んだ時、フォワードに疑問符が浮かんだ。

『事故って何だ？』

と。

結局、その後・・・

「スターライトお・・・」

「ルシフェリオオン・・・」

『ブレイカ

「キヤ

「なんで僕まで

っ！」

「！？」

っ！』

二つの収束砲がフェイトに向かって放たれ、同時に巻き込まれで直人まで食らった・・・

余談だが、闇那にこの事がばれて、なのは・フェイト・星奈が説教を受けるという珍しい光景が見られた。

**番外編 ヘルズファング破廉恥事件簿 File 2 (S) (後書き)**

次回は『番外編 私、料理下手を克服しますっ！(A)』で、更新日は・・・未定です。

更新の際に活動報告でお知らせします。

それと、割り込みなので更新しても最新のは出てきませんので。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4242s/>

---

魔法少女リリカルなのは Scarlet&blue 先行公開、超ネタバレ番外編（ち

2011年10月6日20時27分発行